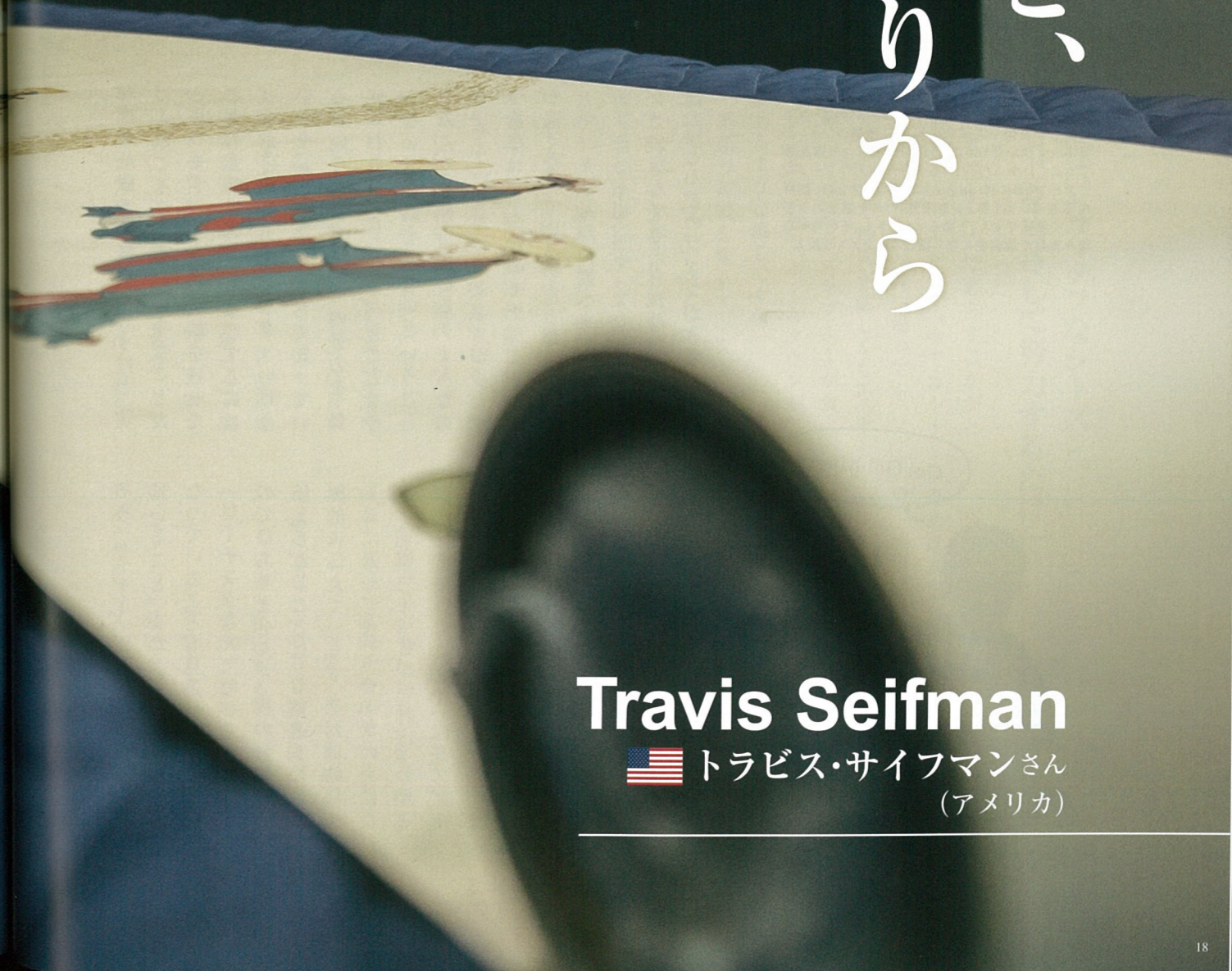



# 近世琉球史を、 江戸との関わりから 見つめる

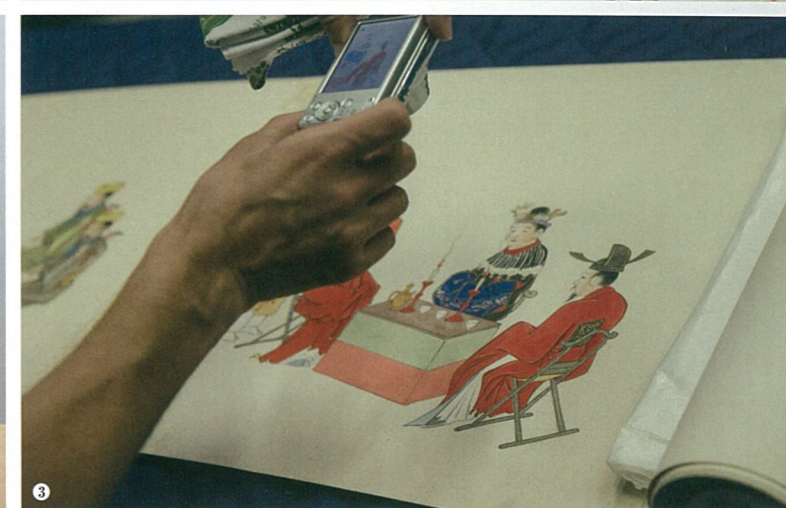
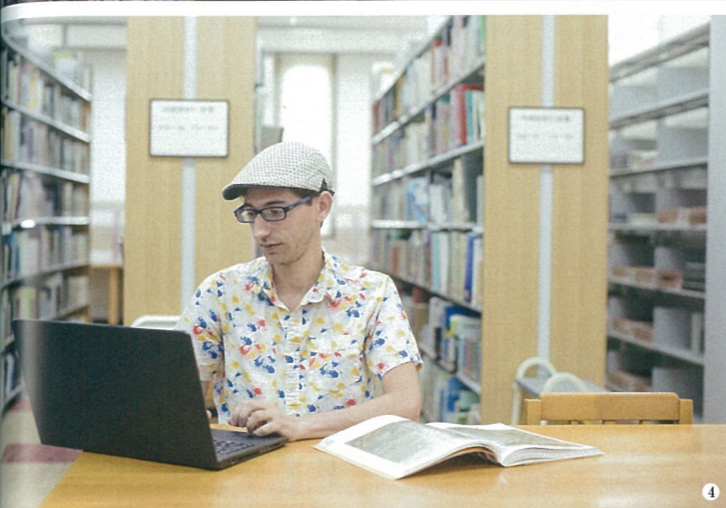


Travis Seifman

 トラビス・サイフマンさん  
(アメリカ)

「江戸上り」行列絵巻の  
豊かな色彩に魅せられて

カリフォルニア州立大学サンタ  
バーバラ校大学院の博士課程で、近  
世日本・琉球史を専攻しているトラ  
ビス・サイフマンさん。ロンドン大学  
留学中に琉球史に興味を持つよう  
なり、ハワイ大学大学院の修士課程  
に在学中、いわゆる「江戸上り」の行  
列絵巻を見て魅了されたという。  
「本来にカラフルな世界で、素晴ら  
しかった。行列絵巻なので、楽童子○  
○里之子とか、名前や役職が書いて  
ある。この豊見城王子は誰でしょう  
とか、本当にワクワクしました」  
修士号取得後の進路を考えると、  
琉球のことを研究したい。でもこれ  
まで学んできた近世日本のことは捨  
てたくないというジレンマがあった。  
「日本のことはある程度わかるので、  
日本と琉球をつなげることを研究し  
ようと思いました。博士論文のテーマ  
として、琉球人は、服装・音楽・儀礼等  
を通して、琉球のアイデンティティ  
をどのように表していたのかについ  
て研究しようと思ったんです」



①琉球人舞楽絵巻物の1シーン目は薩摩藩邸で琉球人が書を披露している場面。思わず笑顔に ②南城市で開催されたイベントに、組踊「二童敵討」を見に行った。「唱え(セリフ)が面白い!ワクワクします」 ③同絵巻の第16図風争記。「唐劇かなあ。明の時代の装束みたい。これは興味深い!」 ④琉球大学図書館にて調べもの ⑤琉球大学豊見山ゼミにて ⑥琉大では学内の「国際交流会館」で暮らす

## 「沖縄でしかできないことを 広く経験してみたい」

琉球人行列絵巻から、琉球の外交政策にも興味を持ったトラビスさん。「例えば琉球使節には正使と副使がいて、正使は王族など身分の高い人で、儀礼用の人材ですね。外交スキルを持っている経験豊富な人は副使になる。これは面白いな!」と思いましたが、19世紀のイギリス人外交官ジョージ・マッカートニーの日記には、清でLoochooという島国からの官吏

二人に会ったと書いてありました。二人ともマナーがすばらしく、優しさと。中国で、琉球人はイギリス人、朝鮮人、ラオス人、タイ人とも会って、国際的な交流をしました。日本に行った時には、朝鮮人にすら会っていませんよね。牧志朝忠が北京でロシア人と友達になって、10年後、20年後に琉球でその人と再会するとか、すごいですね!琉球の歴史は国際的です。本当に面白いと思います」

今回、日本国際基金の日本研究フェローシップで日本へ留学することが可能に。2017年3月までは琉

球大学で、4月以降は東京大学で学ぶ予定だ。実は日本留学は五度目で、一次資料を読めるほど日本語は流暢。「本当はもっと文献を読みたいといけません。私は沖縄研究の学者の卵だから、沖縄でしかできないことは広く経験してみたい。美術館や博物館に行つて、本物を見たり、組踊とか琉球芸能を見るのも、大切だと思っています」

研究の一環として沖縄県立博物館・美術館所蔵の「琉球人舞楽絵巻物」を閲覧した。一見して熊本藩御用絵師の杉谷行直の筆致に似ていることを指摘。

「本人かも弟子かもしれません。美術の専門家が見ないとわからない。でも、着物の帯の描写とか、とても細かいですね。これは図録の写真では、見てもわからないですね」

写真のなかった時代、絵巻には記録としての側面があった。この「琉球人舞楽絵巻物」は、1832(天保3)年に、豊見城王子を正使とする謝恩

使一行100人あまりが江戸へ行った際、江戸の薩摩藩邸のひとつ白金邸で開かれた宴席で芸能を披露した際の絵だといわれている。

「あつ。踊りや芝居をやっている人の中に、楽童子じゃない人もいますね。これは少年じゃない、おじさんです(笑)。踊り専門の人だけでなく、役人も踊りを披露していたんですね」

本物を見ると、ディテールから見や確認があるのが楽しいと語る。県立博物館・美術館の外間一先学芸員に、江戸へ行く琉球使節は糸蔵が大きい江戸与那という型の三線を使っていたことなどを聞き、何度も絵を覗き込んで、あることに気付いた。絵の中で三線の胴に張られた皮が白っぽいのだ。衣装の精緻な描写と見比べると、蛇皮が描き込まれていないことには違和感がある。

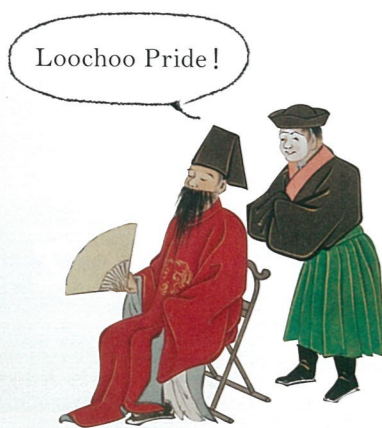
「皮のことは、音楽や芸能の先生方にも聞いてみたいですね。本物を見ることもですが、ここでしかできないのは、先生たちと会って話すこと。研究がきっかけで人に会うのは、それ自体すごく楽しいです。」

琉球大学では豊見山和行教授のゼミに出ている。アメリカの大学では、

学期中はひとつのテーマで、皆が同じ文献を元にディスカッションをするという。沖縄では、ゼミのメンバーが毎週一人ずつ自分の研究について発表を行い、教授もまじえて質疑応答をするスタイルだ。

「自分の専門外の話を聞くのは楽しいです。みんな興味深い研究をしていますよ。問題は私の日本語のほうで、みんな私に話す時はわかりやすく話してくれるけど、ゼミでの質疑応答はネイティブのスピードなので、ついていくのはハードです」

あと2年ぐらいで、博士論文を仕上げたいと語るトラビスさん。行列絵巻から始まった琉球史をめぐるアドベンチャーは、まだ続く。



外国人が沖縄の島々を愛する理由、世界のウチナンチュ大会レポート、  
外国人の視点から、沖縄がまだ知らない沖縄の魅力を再発見する一冊！

nomoto

モモ

Vol.29  
木々

ト

外国人が見た沖縄

私が沖縄を愛する理由

世界のウチナンチュ大会スペシャル  
ふるさと沖縄への手紙

謝謝沖縄 沖縄に恋した隣人たち  
琉球見聞録 加計呂麻島

Why I Love Okinawa  
A foreigner's point of view